

Eureka X

六年制通信 No.29 令和4年12月16日(金)号

大人であれ

君たち「他人事」を「ひとごと」と読みますか、「たにんごと」と発音しますか。私はこれを「ひとごと」としか読めないのですが、最近は「たにんごと」でも通じているようですね。気持ち悪るっ。「公の場」は「おおやけのば」と読めていますよね。まさか「こうのば」なんて言っていないでしょうね。「物議を醸す(かもす)」とは言いますが、「物議を呼ぶ」とか「物議を醸し出す」などとは言わないこともわかっていますね。この手の誤用を目にしたたり聞いたりとすると、やはり言語って時代とともに変化していくんだなあ、などと感慨にひたることはなく、腹立たしく思っ心の中で訂正してしまいます。時々口に出ているようです。老人の嫌われるところですね。

それで、正しい日本語を読みたくって手に取るのが阿川弘之のエッセイです。前にも書いたかな。私の恩師は夏目漱石を非常に尊敬されていて、翻訳をされる時には事前に漱石、あるいは鴎外の訳した『即興詩人』などを読まれると仰っていました。先生には申し訳ないのですが、私には漱石は、特に『吾輩は猫である』などは冗長に過ぎると感じられ、正直面白くないのです。あれは、今で言う楽屋落ちの話なのでから漱石は面白がって書いたのでしょうか、私は笑えません。漱石や鴎外よりも志賀直哉の『城の崎にて』なんかは日本語のリハビリにもってこいだと思います。ですから時折読み返しています。いつでしたか今の四年生の諸君に朗読しましたよね。

私が阿川さんを選ぶのは上質のユーモアを感じるからです。阿川さんは学生の時に海軍に入り、というか予備学生として入隊したのですが、軍隊といえ融通の全く利かないコチコチの軍人の集まりかと思いきや、「諸君、アングルバーにはなるな。フレキシブルワイヤーになれ」と言われたそうなのです。アングルバーはL形断面の鋼材ですから非常に強いけれど、強度以上の負荷がかかれば当然折れます。しかしフレキシブルワイヤーは強そうに見えないけれど、しなやかで切れることはありません。人間もそうあるべきで、普段から緊張していたら、いざという時に役に立たない。普段はリラックスしていなければいけない、上官にそう言われて驚いたと阿川さんは書いています。「ユーモアは一服の清涼剤」とも教えられたそうです。大人の組織ですね。私の好きな話を二つ書きましょう。これは前にも紹介しましたが、イングランド出身の議員がスコットランドをバカにして(イングランドとスコットランドは仲が悪いのです、歴史的に。ちなみに我々がニール先生はスコットランド出身です)「イングランドでは馬が食っている燕麦をスコットランドでは人間が食っている」と言いました。燕麦はオートミールのことです。するとスコットランド出身の議員がすかさず「全くその通りであります。だからイン

グランドの馬とスコットランドの人間が優秀なのであります」と応じたというのですね。イングランドの競馬は有名ですからね。これで議会は笑いに包まれて、一件落着。スコットランドをバカにした議員もお咎めなし。さて、こういう会話、私たちにできますかね。ユーモアのかけらもない、ということは非常に子供っぽい会話しかできなくなっていないませんか、昨今の私たちは。だとすると恥ずかしいですね。もし、日本の国会でこれに類する発言があったとしたら、ユーモアに皮肉を混ぜて言い返す人もいないでしょうし、言った議員は懲罰委員会にかけられて大騒ぎでしょうね。

もう一つ。軍艦八雲の高木中尉が長い航海を終えて佐世保に帰ってきた。新婚の妻にその旨を電報で伝える。すると妻が喜んで無邪気に「マアウレシイ」と打ち返してしまった。さて、この電報が軍艦八雲にどのように届けられるかという、大きな軍艦が一番沖に繫留しますから、陸から八雲までいくつかの小さな軍艦を手旗信号で「マアウレシイ」が送られ、それぞれの艦で記録されるわけです。「宛、高木中尉、本文、マアウレシイ。以上」とね。何じゃこりゃ、というわけで、上官から叱られるかと思いきや、高木中尉はそれから「おい、マアウレシイは元気か」と散々からかわれたそうです。今ならどうでしょう。「マアウレシイは元気か」とからかわれたから、もう八雲には戻れないとか言って、高木中尉が艦隊勤務を拒否し、からかった上官が謝罪をするなどといった光景が繰り広げられるのでしょうかね、きっと。でもね、からかわれて照れ隠しに頭をかいて笑っている、大人の対応をする高木中尉の方が、私は好きです。

今週のおすすめ

・ 柚月裕子 『教誨』 (小学館)

死刑囚の刑が執行されると、遺骨その他の引き取り手が問題になるのですね。大きな罪を犯したわけですから親戚からはとっくに縁を切られていることも多いと聞きます。今回は小さい時に一度会ったきりの遠縁のところに遺骨や遺品が届けられます。物語はそこからスタート。どうして彼女は自分の娘を含め幼子を二人も手にかけてのか。最後の言葉「約束は守ったよ。褒めて」とは何のことか。彼女と親交のあった人に話を聞くうち悲しい真相がわかってくる、というお話。設定の難を言えば、君たちにとっては、遠い昔の、村社会に生きる女性の悲哀が理解できないかもしれません。それが結構ポイントなんですけどね、この話の。

死刑囚を扱った物語としては加賀乙彦の『宣告』が、私は一番好きです。モデルがいますね、メッカ殺人事件の正田昭という実在の人物です。中公新書の『死刑囚の記録』にも正田昭のことが紹介されています。私は加賀さんの本を読むまで「罪を憎んで人を憎まず」なんて、そんなことがあるものかと思っていましたが…。

グリーンマイルという映画では冤罪と知りつつ死刑を執行しなければならない刑務官の苦悩が描かれていましたが、加賀さんのモデルは冤罪ではありません。しかし、死刑が確定して以降の正田昭の変化に、本当にこの人物を死刑にしていいいのかと加賀さんは本気で思ったようです。一度君たちも読んでごらん。

BGMは サザン・オールスターズ の愛の言霊 でした…。